Press Release（第 2 弾）
2026 年 11 月 10 日

特別展「ラファエル・ザルカ：幾何学、時間、スケートボード」

会期：2027 年 2 月 6 日(土) ～ 5 月 5 日(水・祝)

彫刻、写真、映像、ドローイング、文筆などにより、科学史・美術史・ストリートカルチャーといった異なる領域を軽やかに横断するフランス現代アーティストの実践



1

京都市京セラ美術館では、パリを拠点に活動するアーティスト、ラファエル・ザルカ（1977– ）の日本初となる大規模個展を開催します。

ザルカは、美術を起点に、幾何学、建築、スケートボードなど、さまざまな領域を横断しながら、形態と空間、運動と時間の関係を探究してきました。数学や科学の歴史、歴史的な図版、都市空間などに着想を得て見出した形や構造を、彫刻、写真、映像、ドローイング、文筆など、多様な表現へと展開しています。例えば、日時計の形をもとにした作品や、数学者が考案した立体モデルを木彫で表現した「シェーンフリース一家（いっか）」シリーズなど、異なる領域に由来する知識や視点を結びつけ、ひとつの形を独自の視点で捉え直し、別の文脈へと移し替えることが、ザルカの制作を特徴づけています。

また、自身もスケートボードライダーであるザルカにとって、スケートボードは重要なテーマのひとつです。街の段差や斜面、曲面を滑走するための地形として捉えるスケートボーダーの視点に着目し、公共彫刻を滑走するスケートボーダーの写真を収集・選定したシリーズや、実際に滑ることのできる彫刻などを制作してきました。そこには、身体の動きと空間の関係だけでなく、公共空間を誰がどのように使うのかという問いも含まれています。

本展では、これまでの代表作に加え、京都での滞在を通して制作された新作も展示予定です。70 点を超える作品を通して、ザルカの探究の軌跡に触れる機会となります。

※本展は当初「思考する彫刻家 ラファエル・ザルカと堀内正和―幾何学とモダニティをめぐる対話（仮称）」として企画を進めておりましたが、諸般の事情により、ラファエル・ザルカの個展として開催します。

本展のみどころ

1. さまざまな作品に繰り返し現れる「形」

彫刻、絵画、写真、ドローイングなど、異なる表現形態の作品に、共通する形やモチーフが繰り返し登場します。ザルカは、幾何学や科学、歴史的な図版などから形を見出し、それらを異なる素材や表現へと展開してきました。ある作品で見た形が、別の作品では思いがけない姿で現れることも。本展では、作品ごとの違いを楽しむとともに、繰り返し現れる形を手がかりに、作品同士のつながりを探してみてください。

2. 巡るたびに新しい発見がある展示空間

本展では、展示室に設けられた 2 つの入口から、それぞれ異なるルートで鑑賞を始めることができます。定められた順路で一方向に進むのではなく、空間を循環するように行き来しながら鑑賞できる構成です。展覧会は全 4 章で構成されますが、それぞれに決まった順序はなく、各章が互いに重なり合うように展開されます。展示室を巡るなかで、前に見た作品に再び出会ったり、別の作品とのつながりに気づいたりすることもあるかもしれません。同じ作品でも、見る位置や順番が変わることで、印象が異なってくることもあります。ぜひ展示室内を行き来しながら、自分なりの順番で作品を巡り、繰り返し見ることで生まれる新たな発見をお楽しみください。

3. 日本の伝統色を用いて現地制作される新作《日時計の抽象》

本展では、京都で制作した新作絵画《日時計の抽象》を初公開します。作品には、既存のシリーズで用いられてきた色彩に近い日本の伝統色を採用しています。日時計に見られる幾何学的な形や模様を出発点とする本シリーズにおいて、色彩は形の構成とともに重要な要素となっています。ザルカが継続的に取り組んできたシリーズが、日本の伝統色を取り入れることでどのように展開されるのか。本展のための新作制作を通して生まれる新たな表現にもご注目ください。



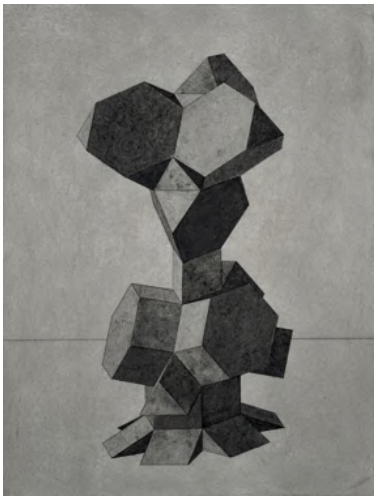
2



3



4



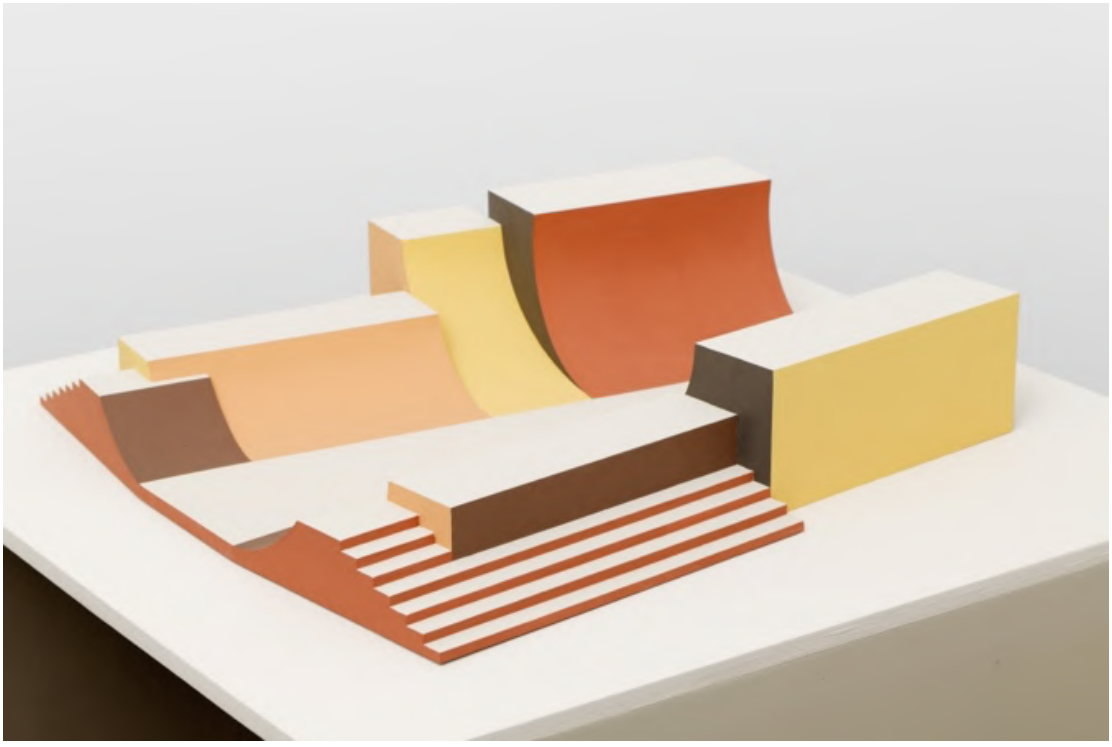
5



6



7



8



9



10

Press Release（第 2 弾）
2026 年 11 月 10 日

作品解説（参照図版）

※番号は前ページの広報図版に対応しています。
※画像掲載時には、キャプション、クレジットの下線部分を必ず併記してください。

図版 1 ｜《マウント・メルヴィル》

スコットランドのメルヴィル山にあった 18 世紀末の日時計をもとに制作された彫刻。元となった石造の日時計は、小さな柱や多面体、立方体など、異なる形態を積み重ねた構造を持ち、各面には円やハート形などのくぼみや装飾が施されていた。それは、ルーマニアの彫刻家コンスタンティン・ブランクーシ（1876–1957）の積層的な彫刻作品や、日本の伝統的な石灯籠の形態をも想起させる。こうした複雑な形態の組み合わせを、オーク材とコンクリートを用いて再構成し、時刻を示す道具としての機能を離れ、彫刻として捉え直すことで、幾何学的な形態と装飾が織りなす造形そのものを際立たせている。



《マウント・メルヴィル》
2018　無垢のオーク材、コンクリート　192×50×50 cm
ルーマニア国立現代美術館（ブカレスト、2019）での展示風景
Courtesy the artist and Galerie Mitterrand, Paris
© Raphaël Zarka / ADAGP, Paris & JASPAR, Tokyo, 2026 C5692

図版 2 ｜「モンテ・オリヴェート」シリーズ／「シェーンフリース一家（いっか）」シリーズ

【壁面：「モンテ・オリヴェート」シリーズ】

イタリアのモンテ・オリヴェート修道院にあるルネサンス期のフレスコ画から着想を得たシリーズ。フレスコ画とは、漆喰を塗った壁が乾く前に顔料を定着させる技法で、ルネサンス期のイタリアでは宗教的な物語や建築空間を彩るために広く用いられた。ザルカが注目するのは、絵画に描かれた物語ではなく、その背景に見られる建築的な要素や、大理石を模した幾何学模様である。これらは修道院の回廊に施された実際の装飾であり、ザルカはそのデザインと寸法を象嵌の技法を用いて忠実に再現することで、幾何学的な構成が持つ時代を超えた美しさを際立たせ、歴史的な装飾を現代の彫刻表現へと展開している。

【立体：「シェーンフリース一家（いっか）」シリーズ】

ドイツの数学者アルトゥール・シェーンフリース（1853-1928）が研究した、結晶の規則的な形や対称性に着想を得た彫刻シリーズ。シェーンフリースは、結晶に見られる形の繰り返しや規則性を数学的に整理し、物質の構造を理解するための研究に取り組んだ。ザルカは、こうした数学的なモデルを木製の立体として再制作し、同じ形を複数組み合わせることで新たな構成を生み出す。数学の研究に基づいた形を彫刻として捉え直し、規則的な形の組み合わせによる造形の可能性を探っている。



「モンテ・オリヴェート」シリーズ
2016　インクで描いた紙を象嵌状に紙に貼付　各 76×56 cm

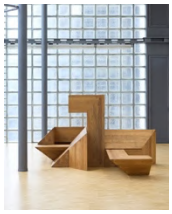
「シェーンフリース一家（いっか）」シリーズ
2016　無垢のチェリー材　サイズ各種

FRAC フランシュ＝コンテ（フランス・ブザンソン、2018）での展示風景
Courtesy the artist and Galerie Mitterrand, Paris
Photo: Blaise Adilon
© Raphaël Zarka / ADAGP, Paris & JASPAR, Tokyo, 2026 C5692

図版 3・6｜「空間を敷き詰める」シリーズ

「シェーンフリース一家（いっか）」と同じく、ドイツの数学者シェーンフリースの研究に由来する立体モデルを出発点とする彫刻シリーズ。ザルカは、基本となる形を木製の立体として再制作し、それらを組み合わせて空間を構成する。さらに、スケートボードで滑走できる規模へと展開することで、数学的な形を身体の動きと結びつける。数学のために考えられた形が、実際に人が動き、遊ぶための形態となって空間を充たしていくことを通して、幾何学は図形から彫刻へ、そして空間と身体へと拡張されていく。

【図版 3】
《空間を敷き詰める――レギュラースコア W8M1》
2016　無垢のオーク材（8 モジュール）　168×336×168 cm
エルメス財団（東京、2024）での展示風景
Courtesy the artist and Galerie Mitterrand, Paris
Photo: Nacása & Partners Inc. / Fondation d'entreprise Hermès
© Raphaël Zarka / ADAGP, Paris & JASPAR, Tokyo, 2026 C5692



【図版 6】
「空間を敷き詰める」シリーズ
パレ・ド・トーキョー（パリ、2016）での展示風景
Skater: Sylvain Tognelli / Photo: Maxime Verret
© Raphaël Zarka / ADAGP, Paris & JASPAR, Tokyo, 2026 C5692



図版 4｜《ロワズルリー No. 1》

17 世紀の石造多面体日時計の形をもとに、インクとジェッソを用いて厚紙上に描き出したドローイング作品。本作の着想源となったのは、フランスのシャラント地方にあるロワズルリー城の日時計である。石造多面体日時計とは、複数の平面を持つ石造りの立体で、その各面に文字盤や目盛りが設けられ、太陽光によって生じる影の位置から時刻を読み取る計時器具である。ザルカは、複数の石材で構成された日時計の立体的な構造と、その表面に刻まれた幾何学模様を、アクソノメトリー*によって平面上に描き出している。また、本作の構成には、異なる素材を組み合わせて装飾的な模様を生み出す象嵌の技法が参照されている。歴史的な計時器具を精緻な幾何学的ドローイングへと置き換えることで、ザルカは、その実用的な機能と彫刻的・美的な性質との関係を浮かび上がらせている。

*“アクソノメトリー”とは、立体を二次元の平面上に表現する図法の一つで、遠近法のように奥行きに応じて遠くのものを小さく描くのではなく、平行な線をそのまま保ちながら、立体の形状や各部分の位置関係を表す。この図法は、現代の美術家や建築家にも広く用いられている。

《ロワズルリーNo.1》
2022　厚紙象嵌にインク、ジェッソ　59×43 cm
Photo: Romain Darnaud
Courtesy the artist and Galerie Mitterrand, Paris
© Raphaël Zarka / ADAGP, Paris & JASPAR, Tokyo, 2026 C5692



図版 5｜「ハルトの翻訳」シリーズ

1625 年にドイツの職人・著述家ペーター・ハルト（1575–1634 年以降）が刊行した著書『建築に携わるすべての人のための透視図法による製図術』（邦訳未刊）の挿絵に基づくドローイングのシリーズ。同書には、多面体を組み合わせた幾何学的な形態が、透視図法を用いて描かれている。ザルカは、実際には立体として制作されることのなかったこれらの図版を“仮想の彫刻”として捉え直し、そこに描かれた形態を、奥行きや空間的な関係性を保ちながら、アクソノメトリーへと置き換えている。ドローイングは、木炭や鉛筆に加

え、約 2,000 年前にオリーブオイルの貯蔵等に使われた壺に由来する、古代ローマ時代のテラコッタ（素焼きの陶器）の破片を紙に直接こすりつけて描き出している。古代の物質がドローイングの一部となることで、そこには異なる時代の時間が重なり合う。ザルカは、原画に描かれた形態を単に再現するのではなく、そこに潜在する彫刻としての可能性を引き出すとともに、ドローイングと彫刻、記録と創造、さらには過去と現在の新たな関係性を見出している。



《ハルトの翻訳 No.1》
2019　紙に木炭、鉛筆、ガロ・ローマ時代のテラコッタの擦り取り　76×56 cm
Courtesy the artist and Galerie Mitterrand, Paris
© Raphaël Zarka / ADAGP, Paris & JASPAR, Tokyo, 2026 C5692

図版 7 ｜「ライディング・モダンアート」シリーズ
公共空間に設置された近代彫刻作品の上で、スケートボーダーが滑走やトリックを行う様子を、ザルカが収集・選定した写真シリーズ。スケートボーダーは、彫刻の傾斜や曲面、段差などを、滑走のための地形として捉える。ザルカは、こうした行為を通して、彫刻が本来備えている形や動きの可能性を引き出し、鑑賞するだけでなく、身体を通して関わることで、美術作品や公共空間の見え方が変わることを示している。



《ライディング・モダンアート（写真アーカイブ）》
2007-2017　ファインアート紙にピグメントプリント　70×50 cm
(Sculpture: André Volten, Untitled, 1980-1982, Utrecht /
Skater: Oskar Rozenberg Halberg / Photo: Marcel Veldman, 2014)
© Raphaël Zarka / ADAGP, Paris & JASPAR, Tokyo, 2026 C5692

図版 8 ｜「サイクロイド曲線のスケートボードランプ」シリーズ
数学や物理学で研究されてきた曲線「サイクロイド」を、スケートボード用のランプへと転換したシリーズ。サイクロイドとは、円が直線上を転がるとき、その円周上の一点が描く曲線である。17 世紀の科学者ガリレオ・ガリレイはこの曲線に関心を寄せ、落下する物体の運動との関係を研究した。ザルカは、世界で最も速度が出る曲線としてのサイクロイドに魅了され、この数学的な形態を実際に滑ることのできる構造へと置き換えている。数式や図面の中に存在する形態を、身体を通じて体験できるものにすることで、科学的探究と遊び、彫刻の関係を探っている。本展では、このランプの構造を縮小した模型を展示する。



《サイクロイド曲線のスケートボードランプ No.2》
2024　塗装した合板、木質繊維板　15.5×67.5×67.5 cm
Photo: Romain Darnaud
Courtesy the artist and Galerie Mitterrand, Paris
© Raphaël Zarka / ADAGP, Paris & JASPAR, Tokyo, 2026 C5692

図版 9 ｜「日時計の森」シリーズ
17 世紀から 18 世紀のスコットランドの日時計に見られる、三角形、円形、半円形の模様に基づく作品シリーズ。木製の板を支持体としており、日時計の装飾には、時刻や太陽の動きを示す形態が組み合わされている。一見すると純粋に装飾的に見える形態も、それ自体が日時計として機能しており、ザルカはこれを“機能する装飾”と呼ぶ。ザルカはこうしたモチーフを抽出し、木の表面に版を重ねて刷ることで、新たな色彩や模様の組み合わせ

を生み出している。また、日時計のモチーフや構成を、ロシアの画家カジミール・マレーヴィチ（1879–1935）やオランダの画家テオ・ファン・ドゥースブルフ（1883–1931）らに代表される、構成主義、シュプレマティスム、デ・ステイルなどの西洋近代美術の造形と結びつけて捉えている。歴史的な科学機器に見られる形態を絵画的な構成へと転換することで、ザルカは機能と装飾、科学と芸術の関係を問いかけている。



《日時計の森 No.22》
2023　重ね刷りによるモノタイプ、塗装合板に貼付した紙に描画　41.5×29.5 cm
Courtesy the artist and Galerie Mitterrand, Paris
© Raphaël Zarka / ADAGP, Paris & JASPAR, Tokyo, 2026 C5692

図版１０｜「日時計の抽象」シリーズ

歴史的な日時計に刻まれた模様や幾何学的な形を、抽象絵画へと展開したシリーズ。原題に使われる“ノーモニック（Gnomonique）”という語は日時計や、影を利用して太陽の動きを観測することに関係する言葉である。ザルカは、日時計の表面に見られる円や三角形、直線などを取り出し、色彩と組み合わせてキャンバス上に再構成する。また、その構成には、オランダの画家ドゥースブルフら近代美術の作家による、斜めの線を取り入れた構成が参照されている。もともとは時刻を示したり、天体の動きを読み取ったりするための形が、絵画の中では色や形の組み合わせとして現れる。本シリーズは科学的な目的から生まれた形を抽象絵画へと移し替える試みである。



《日時計の抽象 11》
2020　麻布キャンバスにアクリル　200×300 cm
Photo: Vincent Everarts
Courtesy the artist and Galerie Mitterrand, Paris
© Raphaël Zarka / ADAGP, Paris & JASPAR, Tokyo, 2026 C5692

Press Release（第 2 弾）
2026 年 11 月 10 日

プロフィール

ラファエル・ザルカ｜Raphaël Zarka （1977- ）
フランスに生まれる。パリ国立高等美術学校卒業。
ザルカの“拡張された”彫刻分野の活動には、写真、ドローイング、文筆も含まれ、特にスケートボードの形態と空間に関する 3 つのエッセイの著者としても知られている。ザルカの制作手法は研究者や考古学者のそれを思わせ、自作を“ドキュメンタリー・スカルプチャー”とも称する。特に、科学や技術の領域で美術史の周縁から借用される幾何学的形態の変遷に関心を寄せる。現在は 17 世紀ヨーロッパの自立型日時計の進化に関し、自身のアート制作により博士号を取得することを目指している。
2026 年 4 月から 7 月にかけて京都のヴィラ九条山に滞在し、リサーチや制作を行った。



Raphaël Zarka
Photo : Maxime Verret
© Raphaël Zarka / ADAGP, Paris & JASPAR, Tokyo, 2026 C5692

開催概要

特別展「ラファエル・ザルカ：幾何学、時間、スケートボード」
展覧会ウェブサイト：https://kyotocity-kyocera.museum/exhibition/20270206-20270505
会期：2027 年 2月6日（土）～5月5日（水・祝）
会場：京都市京セラ美術館　新館 東山キューブ
開館時間：10:00～18:00（最終入場 17:30）
休館日：月曜日　※ただし、3 月 22 日（月・休）、5 月 3 日（月・祝）は開館
主催：京都市、ソニー・ミュージックエンタテインメント、関西テレビ放送、毎日新聞社
助成：ヴィラ九条山*、一般財団法人 NISSHA 財団
協賛：株式会社長谷ビル、I-PEX 株式会社、大和ハウス工業、日本管財株式会社
個人協賛：Seth & Yana Coren
協力：艸居
*本展は、ヴィラ九条山のレジデンス修了者支援プログラムを通じて、アンスティチュ・フランセ、アンスティチュ・フランセ日本、ベタンクール・シュエーラー財団の支援を受けています。

お問い合わせ：京都市京セラ美術館　TEL. 075-771-4334

チケット料金｜12/1（火）午前 10 時より販売開始！

◉一般 1,800（1,600）円　◉高大生 1,300（1,100）円　◉中学生以下無料
販売先：美術館公式オンラインチケットで販売。
※いずれも税込　　※（）内は 20 名以上の団体料金
※障がい者手帳等をご提示の方は、本人及び介護者 1 名無料（要証明）
※学生料金でご入場の方は学生証をご提示ください　　※すべて前売価格の設定はありません。

【本展のプレス問合せ先】京都市京セラ美術館 広報　西谷・川口・廣海
E-mail：pr@kyoto-museum.jp 電話：075-275-4271